



中村俊定文庫

文庫 18

557



紀行三千里

涼袋著
素外編

安永九刊

原題卷十二



紀行三千里



涼帝

心のみく旅立事乃ありて行誅や心乃
 有る事ありて久くして旅ゆのけき道
 とりし携るはよとるむきむけて秩父乃那宮の石
 みるに歌此のき雨くく神あれて山風を木を
 折ぬく道おくれ日くれよりあり 廿羽
 たくまゝおのき喜ぬ社中誰彼まゝ
 心か世乃まゝなりけん此あこし勢氣棟を
 作りて心あこ半なりけん系事りて

棟揚乃吹雪の山櫻

とつひとを忘れりし一の軒羽是えて語る
今なき語りおとめとわと

標干よきとも言し雪の峰

あけくれ乃雪さめぬきた鳥川す裁しとる
ハキとまふ乃おとめとをぬきあまの末やと
みの夜や切き竹木曾の山のつら
やの曲けて海向乃風涼し
標干風涼しく糸乃花今をほろひのつらふ

草みのまきこてまも海あのみぬ

塩尻流す腰おのけて

ふる士乃来てつらまを飯所も清みか

桔梗の原

むの三軍此まを破れて唯一将乃名やゆ
しつらまをまの原とまを飯所も清みか
あまの原なり

田、所、水乃指園と園の原

負てまを旗をもあり雪の峰

白き心乃物もあまて都々たはるるを花送
雪を融りてとほく柳乃春のふりゆれば
あつはるし秋の程もあつはる事と
なまよひもあつはる谷川乃祖とてふ
て今も山路々々も暑しとてふみ新ぼた
日敷はもとの美濃さへ山路のうたにおほえ
近にもる

加茂川納涼

大路すつとさうりて伴ぬ

春乃顔雪とみありく涼の如
み物も風も晒して涼の如

あつれもさつめ侍

角乃まゝ石と春今も涼の如洛大路

川乃まゝ人ともあつはるすみか 寛次

あつれもさつめ侍

涼乃まゝりて

涼河を流すも涼し水車

いまも甲斐のつとまぬ丸乃旅寐思之

て浪急る浦より旅つゝのなまよ舟より伊
豫乃園志のなまよ舟も今宵より一の
舟もいづれかたもいづれかたもいづれかたも
八傳親を集り飲む能浦乃司野も生キ
てちありしなまよ舟もいづれかたもいづれかたも
まよのいづれかたも

旅つゝのなまよ舟も蔓や瓜名月

お浪花よも舟ちして川もいづれかたも
おもひ出ぬ舟し

お浪花よも舟ちして川もいづれかたも
吹けよも舟ちして沖乃のいづれかたも
室よも舟半舟も舟ちして舟ちして
舟ちして舟ちして舟ちして舟ちして
舟ちして舟ちして舟ちして舟ちして

舟ちして舟ちして舟ちして舟ちして

舟ちして舟ちして舟ちして舟ちして

舟ちして舟ちして舟ちして舟ちして
舟ちして舟ちして舟ちして舟ちして
舟ちして舟ちして舟ちして舟ちして

こゝろあやむくまふりよほりて木るま森の梢に深

輝つれてうらうらやむひらり

岩嶋

おのれ浦を舟りて渡んき時記出んそ
あゝいふしおむちまふらうらうら

いふりたおれうらむらうら

とらり逢おーて又いふらむらうら
こゝろあやむくまふりよほりて木るま森の梢に
もなぬし何事とれむらあれ舟りたむら



五

只生年之る身んて物たれしうめ

追風といれまに涼しううう

冬 彌山

月しひまや西紅の夏木立

これより物に浦に船をて阿法院寺に冬に
木立おやう夏木立といふる

牧石のあはれを無しは然

豊かあはれい夏木立

西澤寺

肌をみ流しありて冬乃秋

宇佐八幡

杉涼し夏幾乃あす秋

こゝの涼く来りほかに入るに道た
ほつのも

西くあつ月長つめて旅麻か

七夕 波の杵

西の坊の波の杵は今宵に地も中へ
なる七夕乃おたりん包なるはあ

てなむれたらしき海ひ雨を信まるとちりし長崎の
ちのき舟乃中なん々所姑やうり我れを内
まゝ笑な〜〇

天能戸や雨ふる我めて二日重

石を備て即らあれ〜とさな流の今なん
姑向るゆて古里忘〜と流日あさ〜其あや
あ〜ん〜程ありぬ。おほえぬ

長崎の

入舟やみぬ春土乃秋能風

彌山之吟とほまゝ辞

竹羽

月しいまや西るれをみよ夏木立

吾徒難〜て曰師始句あ教日を計
我る月乃未ま〜ん一むきた東白と
い〜ん〜と程初乃寧鏡を失了〜と
口おし竹羽曰月なきた以乃五文字寧

寧後を去り 沔山乃眺る東西をよみ
 彼みまきり夕のひかりて月しよやせり
 ちりねんをなやれをん乃風流るる眼か
 乃佳景認めしそて口を忘れくふたせ
 のまや急月しせぬまをく句をかきり
 たりとせんそ文いまや乃傷をのりて西を
 夕陽乃りくさを化り 南をまきき自木
 ちり吹く風しきおあんといふて同士相
 見て笑ふ草逆於心

寒葉齋建凌岱字孟喬為漢画業又遊
 俳諧呼吸露菴涼俣舊名葛嵐後為以片歌
 一家者流更書綾太又都因安永甲午春
 三月十八日没壽五十六葬葛飾牛頭
 禅林

并益寫



吸露菴涼体画と誹をせし世う明後
に歌み遊々又一作家となす是る前の
能師也さるや物故るせと場終焉乃
今日をわくはるる眼ふくわくさる年一
かりしと建思明喪のめしとありて
多衣くまき(笑)とてし書肆醉如
棺を菴山骨お輓一夕燭さかへるを
悔せとてしるして碑をいづく一周とむら
三回を吊おれも(も)共三子事(事)ららし

醉知を本車乃夏思明ハ松平くめ
師のつとと追々隅田河のまきしき園ふ
身より申きしるも嗚呼可惜可傷
家お女稿ハ宝曆甲戌の秋涼師長崎
下向乃日記ある武山此女羽狩行の志
ありて割願ふ命すくものせおなるをひ乃
幸ふかゝるもあはる中彼を亡人を
那りぬれ女稿ありてし(の)ま(り)文(を)す
小傳なるの月といはる乃言我(我)西(西)乃

明く二子軍乃標題法佛の教年
かたひ多直福の標あり印本と乳し
法受の布施ふかむむ筆をたひひ
大社のもの買れは同ふもこも終日花
百句を筆し捨香も後子世々平時
安永九年庚子二月十八日

在古神田玉池一陽井外待也

題花

花乃前ふ喜や昔此をとりて
眼みたりあり花の記法師
旋舟や朝東風くそ花をそけ
月午也只一面うお乃登
道かへ多也中矢師や花の奥
寂しあろおをそく不降雨此日ハ
城跡一三物れあり花の記法師
虚を信乃ふ花の記法師

あゝあやせ花より人ふ山路とそ
花——く價何れも花乃陰
おのほそ粒き——糸を休めけり
さす申えまきい昔若木此須戸のを
蝶——く——かされてちうさ
宗瓶乃あや識——大書院
申——く——糸をちうさて歩行る
美津——し——花をく廊の旭語
く——れ——き——く——み——新れ山

花はのりけき片死乃をり視
換乃雲千届くや治癒れ花
眼をちうて休まむおのより山
又——し——凡あまのれを
世の——り——積る日移る花乃雪
と川宗此そ糸や河川の日記り
解るる花ハ提るり法不女才
芝不解位人とのをさし——ろ
あいのとあおといは是を蹄——一本

下馬れと云ふ事此傳へ
是もいふ事くさや酒の女
妻子傳ふ事と云ふ事や
初云ふ事と云ふ事と
縁勝ふ事と云ふ事
曉鐘ふ事と云ふ事
ある事と云ふ事
花と云ふ事
さういふ事

おき様の風より
襟に花は
襟袖に花は
是れ雲降る事
はく事
久しき事
彈子に
は花に
いふ事
八重の肥と云ふ事

心ゆくも人をいふもなき
糸はけや掛く夜の光り
花見ふも如きと通所
杉杉乃懸ひやけり原の人
蜂も鳥も折るも花ありて
花あはれも志がなき家持
湖水渺々花嫁さくさく
かすらもあはれを鞠かきり
生伸ぶもあはれをいひて

日宮のふかき中し佳義証
簾く風一木花祖乃也
花の陰か休めりある
心ゆくも心ゆくもあはれ上
もろしはる路をさあ花の時
大津の夜ハミしるる猿も
さるも音なりけり谷はさる
心ゆくも心ゆくも帆はさる
撞んては踏ふ白や花乃風

心ゆく

心ゆく

降つらるる夢や幸ひのき佛
おとよほし人は味方や夕日夜
かゝる夢をたもておとよほし
却きつゝ花をば見れ肩車
四方くく不書とたまふく花山く
嗟ふつゝ心はほろくつゝと里はむ
林間へ冷酒とよ花日花
東や下る夢よふる花をわかれ
けくく人なき夢の降乃堀はむ

夢相おちるを休む花の陰
初夢よふ井と夢いそく入る
立伴つゝつゝ田中れ夢はむ
乞ふつゝつゝ花を酔ふ心はむ
ちる夢や法師れよある歌のつゝ
かゝる夢をたもておとよほし
冥加ある花や抽席へ井一社
あもつゝつゝつゝ骨也と若く同
桂海乃夢や夢よ夢よ夢よ

さほ姫のよき物あやうし
さほより佛よあふ本を以

十五

一陽井藏板

書林

江戸室所三丁目

須原屋市兵衛

昭和十四年六月十五日寫校了
原本 松守文章 中村俊定藏



